
〇〇VS男子高校生（2名）

望月光輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〇〇VS男子高校生（2名）

【Nコード】

N3811R

【作者名】

望月光輝

【あらすじ】

とりあえず何かとイベントにケチをつけたがる男子高校生こと祥野陽太とそんな彼に引きづり回される友人水城剛、クリスマスイブに絶望感を味わった陽太はある作戦を決行する。そしてその作戦に巻き込まれる剛。そんな二人のもとに現れた一人の少女。男子高校生二人組と謎の少女の非日常が幕を開ける。

一夜目：サンタを見つけました（前書き）

ひさびさに書いたので文に脈絡がない可能性があります。

一夜目：サンタ見つけました

クリスマス

イエス・キリストの降誕を祝うキリスト教の祭日。
日本でのクリスマス

街が色鮮やかなイルミネーションに彩られ、家族もしくは友人そして恋人と過ごすことを前提としたイベントのこと。

子供たちはサンタクロースという世界を一夜にして闊歩する謎のスーパー老人からのプレゼントを楽しみにし、各企業及び商店街などはまさに稼ぎ時と言わんばかりの勢いでセールなどを実行する。
もはや元の肅々とした雰囲気は消えうる日のことである。

しかし、この聖なる日12月24日にも独りで過ごすものがいた。

「クリスマスって何の為にあるんですか」

独りさびしくイルミネーションの波の中を背を丸めながら歩く彼
こと 祥野 陽太 しょうの ようた 17歳である。

「第一日本で仏教のはずだろ、キリストの誕生日祝う意味が分からんわ」

現在彼は、コンビニに買い物に来た帰りであつたのだが、

「一歩外に出ただけでカップルだらけってどういうことツスカ、」
そう、彼は見てしまったのだ。

この聖夜に最悪の物を、

「ユイちゃんがデート中ってどういうことツスカあああー!!」
クラスでちょっと可愛いなあとか思ってた女の子が、隣のクラスの男子と楽しそうに街中を歩いているのを。

「マジ意味わからん、俺が見てるのは夢なのか!そうか!夢なんだな!」

結果、彼は現在クリスマスに失恋した不幸な男子高生に成り下がっていた。

「ならば、目覚める俺！起きてお願い！」

一時間後

「という訳で、」

「俺サンタ捕獲しようと思う！」

陽太は友人の 水城 みずき 剛 こう の自宅で剛にサンタ捕獲宣言をかましていた。

「…訳わからん！」

と陽太に剛が盛大にツッコむ。

陽「いや、だからさあ、何が悪いって問題じゃないと思うの俺は、そりゃありア充は憎いよ、何が憎いのかわからんぐらいに憎い！だが、」

剛「だが？」

陽「リア充全部撲滅とか無理だと思うわけだよ。だから元凶であるクリスマスを運んでくるサンタクロースを潰せばいいかと思って」

剛「サンタの方が無理じゃね？！」

陽「無理じゃない！」

声高らかに叫ぶ陽太。

剛「バカ野郎、俺たち高校生だぜ！現実見ようぜ、サンタなんて現代社会のどこにもいねーんだよ。」

壊れてしまった友人を見ながら悲しそうに呟く剛。

陽「違う！サンタはいる！俺は見た！」

剛「きつとお父さんだよ」

剛の目が明らかに憐れむ目に変わりつつある。

陽「あれは、そう俺が6歳の頃の話だ。」

子供のころ誰でも一度考えたことがあるだろう。

毎年プレゼントをくれる謎の老人ことサンタクロースの面を拝んで

やろうという謎の作戦を、

よくあるのが寝ないでサンタを待つといった作戦であったが、その作戦は親の「早く寝ないとサンタさんが来ないわよ。」などの一言に一瞬で敗北してしまう、もしくは寝るふりをしているつもりが気が付けばクリスマス当日の朝になっていたりなどである。

陽「11年前のクリスマスイブ、サンタの野郎を見るつもりだった俺はことあるうに眠ってしまった、だがやつは違った」

目を輝かせながら語る陽太、彼の友人の目が完璧にあきらめた目になってしまっていた。剛の気持ちを言葉にするとしたら「うわあ、手遅れだあ」といった感じだ。

陽「そう！俺の姉貴は違ったのだ！」

剛「ああ、そういえばお前姉ちゃんいたなあ」

陽「姉貴はことあるうにクリスマスイブに一晩中起きていたのだ！6歳の俺はぐっすり眠っていたのだが明らかに怪しい物音にさすがに目が覚めた！寝ぼけ眼をこすってそこで見たものは！」

剛「ゴクリ」

徐々にヒートアップしてきた話に思わず生唾を飲み込む剛。

陽「姉貴が赤い服に身を包んだ老人と戦っている姿だった！」

剛「お前の姉貴はサンタと戦うのかよ…」

陽「7つの玉を集める某大人気漫画の様に人智を超えた熾烈な闘いだった。壁は抉れ、窓ガラスは吹き飛び、俺の机も大破した…」

陽太は剛にかまわず話し続ける。

剛「お前の姉貴は本当に人類か？」

陽「…俺もわからん、まあその話は置いて、とにかく凄まじい戦いだっただ」

陽太は、一瞬（あれ？俺の姉貴ってヤバくね？）とか考えてしまったが、とりあえず拳を握りしめながら続きを話すことにした。

陽「さすがに、闘いの音に気付いた親父とおふくろが部屋を覗き込

みに来たので、その謎の老人はガラスの吹っ飛んだ窓から飛び降りて逃走してしまった。姉貴曰く『泥棒などの不審人物だと思って襲撃した』とのことだ」

剛「で？なんでそこからサンタはいるに繋がるんだよ？まさかその謎の老人がサンタだっていう訳じゃねえだろうな」

剛が、あきれつつも尋ねる。

陽「そう！そのまさかだったたりする！あの闘いの後半壊した部屋にポツンとプレゼントが置いてあったんだ、最初はどさくさに紛れて親父がおふくろが置いたものか思ったんだが、二人は『今年のプレゼントだよ』と別のプレゼントを取り出したんだ！俺は思ったね『ああ、あの不審者はサンタだったのか』と！」

剛「おいおい、嘘だろ、そんなとんでも体験語られても…、俺は信じねえからな！とつとかえれ！」

陽「ここまで言っても信じないのか、まあいい、今晚サンタの存在は証明されるのだから！そして今晚サンタは俺に敗北するのだあああ！ハハハハハハハハ！」

若干自分のキャラを見失いつつ高笑いをする陽太。

剛「チッ、もう好きにしろよ、俺は今からゲームするから」

剛は舌打ちしながら自室のテレビに向き合いゲームをし始める。

その後ろから

陽「じゃあ格ゲーやろうぜ、俺持ってきたからさ」

という声がかけられる。

ゲームの準備を二人でし始める。

剛「じゃあディスク貸せよ、お前サンタ来るか見張るんじゃねえの？」

陽「俺1Pがいい、いや見張ってなくても大丈夫だ」

剛「俺あれがいい銃持つてて遠距離攻撃できるやつ、大丈夫って？」

陽「そんじゃ俺は王道の柔道家で、外に罠仕掛けてきたから」

剛「ふーん。おっ、始まった、ちよっお前いきなりハメ技とかずるくね」

陽「ずるくねえよつと、むしろ遠距離できる方がずるい気がする。」

剛「まあ、銃キャラの醍醐味っしょうわ！あつぶねえ」

陽「そんなもんかねえ」

剛「おう、醍醐味だ、醍醐味、っし！必殺！デススコール！」

陽「うむ、なかなかやりよるなあ！だが！甘い、必殺返し！」

剛「なに？！」

陽「龍激拳！！」

Wiener 1P！！

という文字がテレビ画面に現れる。

立ち上がって騒ぐ陽太とへこむ剛

クリスマスイブに二人で格ゲーをするむなしい男子高校生の姿がそこにはあった。

陽「見たか！俺の実力を」

剛「ちつくしよお、もう一回やつぞ」

陽「何度来ても同じじゃ」

ドサツ「キヤア」

剛「調子に乗るってんじゃねえ、ん？」

陽「どした？」

剛「今なんか物音が」

陽「マジで？泥棒とかじゃねえよな」

剛「っ！かお前さっきの対戦中なんていった？」

陽「えーと、外に罨張ってき…た…か…ら？」

徐々に顔が青ざめていく男子高校生二人組。

剛「まさか、」

陽「ついにサンタが来たのか？」

剛「バカ野郎！！人ん家の庭に何してくれてるんだよ！！近所の人だったらどうすんだ！」

剛が部屋から飛び出し玄関に向かいながら叫んだ。

そのあとを虫取り網を抱えつつ陽太が追う。

陽「ちょ、待て！この虫取り網をだな」

剛「いるかボケ！どこに罨なんて張りやがった？！」

陽「裏庭のほうに落とし穴を少々」

剛「アホ！」

裏庭にたどり着いた二人が見たものは

「い、痛いです」

落とし穴にはまったミニスカサントだった。

ミニスカサントは少し短めの金髪に緑の瞳の綺麗というよりも、可愛いといった風貌の少女だった。

陽「お、おおミニスカサントだ」

剛「言ってる場合か！すみません、大丈夫ですか？」

「あ、はい平気です」

剛の手を借りて落とし穴から出てくるミニスカサント。

剛「けがは…、無さそうっすね、この馬鹿がすいません」

剛は陽太の頭を押さえつつミニスカサントに謝る。

ミニスカサントは

「いえ、人様の家の庭に勝手に入った私も悪いんですから、
といいつつ少し困り顔をしている。

剛「いや、マジすみませんした」

陽「剛、剛」

陽太が剛の服を引っ張りつつとある一点を指さす。

剛「んだよ、テーマ少しは反省の色見せやがれ！」

陽「いや、だからアレ見ろよ」

剛「いい加減にしろよ！」

剛が怒鳴りつつ陽太の方を振り向く

剛「お、前、ってやつは？」

だが、言葉が続かない。

陽太の指さすものが目に飛び込んできたからだ。

陽「アレってさあ、サントのそりじゃあねえの？」

トナカイが繋がれた立派なそりが目に飛び込んできたからだった。

剛「は？」

トナカイが鳴いた。

ト「メエー」

「あつ、鈴木さん無事だったんですね」

陽「ト、トナカイってあんな鳴き声だっけ？」

剛「いや、違えだろ」

呆然とトナカイに駆け寄るミニスカサントを眺める。

どうやら脳が今の状態に着いて行っていないようだ。

そして、トナカイに話しかけていたミニスカサントがクルリと振り向く。

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私リリッククロスっていいます」

そして、嬉しそうな笑顔を浮かべながら元気にこう言った。

「今年から日本支部のサンタクロースになりました、よろしく願います！」

一夜目：サンタ見つけました（後書き）

前書きで言ったように本当にひさびさに書きました。そして書き始めはクリスマスだったはず。気が付けばひな祭りも終わっていました。このように毎回ぐだぐだした感じで行きますが楽しんでいただければ幸いです。おそらく更新は遅いです。

二夜目：拳銃見ました

前回までのあらすじ

とりあえずサントア現れました。

現在

剛「粗茶ですが」

リ「あつ、お構いなく」

剛は落とし穴に落ちていた。自称サントア娘にお茶を出していた。

陽太は外でトナカイ（鈴木さん）に絡んでいた。

陽「トナカイって初めて見たわ」

鈴「メエー」

陽「つーかお前マジでトナカイなのか羊とかの仲間なんじゃねえの？」

鈴「メエー」

陽「ちよつ、やめて！頭を噛まないで！うわ！よく見たら目つき悪い！可愛さの欠片もねえ！」

鈴「メエエエエー！」

陽「トナカイの癖になんか歴戦の猛者みたいなオーラが！」

うりうりとかいって鈴木さんに絡んだ結果、返り討ちにあっていた。窓から様子を見守っていたリリが助け船を出すものの、

リリ「ああ！鈴木さん止めて！人を噛まないで！ぺってしなさい、ぺって！」

鈴「メエー」

リリ「止めて！帽子をむしゃむしゃしないでえ！」

ものの見事にサントア帽を奪い取られていた。

陽「この腐れトナカイイイ！」

鈴「フン」

陽「今コイツ鼻で笑ったよ！ム力つくウウ！」

リリ「返してえええ」

陽「剛もこのトナカイになんとかいつてやれよ！」

剛「いいから落ち着けやああ！！そのサント娘もおとなしく座つてろ！」

リ「ヒツ、お、大人しくします！」

剛の怒鳴り声がよほど怖かったのか、涙目になりつつも大人しく正座をしながらお茶をすすりリ。

剛「んで、本題に入るけど」

声を張り上げた本人は肘について不機嫌そうにリリを見ていた。

トナカイに舐められた男子高校生は、友人に鳩尾パンチをいただき静かに部屋の隅で倒れていた。

リ「は、はい！なんでしょうか！」

サント娘は不機嫌そうな剛がとても怖いようだ。

剛「アంతさつき自分のことサంతだつて言つてたけど、」

リ「はい！私今年から日本支部のサంతなんです！！もうプレゼントを配り終わって帰ろうと思っていたところなんです！」

サంతという言葉聞いた途端にニコニコしながら元気いっぱいに話し始める。

剛「えーと、それは新手のギャグ？」

剛はこめかみを押さえながら精一杯やさしめの声を絞り出してみるものの

リ「？ギャグじゃないですよ？」

目の前のサంత娘はキョトンとした表情で答えてくる。

頭痛を感じるのは気のせいではないだろう。

剛（頭痛くなってきた、昔っからこうなんだよなあ、厄介ことをあのバカが運んできて俺がその手伝いをする、でもまさかサంతってあのバカこと陽太はやつと痛みが取れたのか起き上がって二人のところへ近づいてきた。

陽「サంతって支部とかあるもんなの？」

リ「そうですよ！国に一つぐらいはサంతの支部があるんです！か

くいう私のおじいちゃんも去年までは日本のサンタだったんですよ！」

陽「へえー、じゃあサンタの孫娘ってことだ！」

リ「そうですね！」

なにか波長のようなものが合ったようだ。

陽太にいたっては当初のサンタ捕獲という目的がきれいサッパリ脳内から消え去ったようだった。

おそらく失恋のことなど遥か彼方だろう、むしろ可愛い女の子と話せるからなんでもいいのだろう。

えへー、ニコニコー

ぽやぽやした花が飛び交っているのが見える。

剛「仲好さそうでよかったですねえ」

剛はがつくりと項垂れてしまった。

剛「つてそうじゃなくて！」

リ「はい？」

本来の目的を思い出したのか話題を元に戻す剛。

剛「イヤイヤイヤ、サンタ？陽太！お前マジで信じんのかよ！」

陽「リリちゃんがそうだって言ってるんだからサンタでいいじゃん、トナカイもいるしさあ」

リ「あの一」

剛「それで納得すんなよ！だってサンタだぜ！サンタ！有り得ねえだろ！つーかお前ユイちゃんはどうした！」

陽「男は過去を振り向かないもんだぜ、それに女の子とお友達になれる機会なんて少ないだろうが！しかも外人だぜ！外人！おそらくもう一生こんな機会無いぜ！」

リ「すいませーん」

剛「お前そっちの方が本音か！可愛い外国の女の子と仲良くなりただけだな！」

陽「当たり前だろ！」

剛「威張るな！！」

リ「あのー!!」

バカな言い合いを繰り広げる二人にサンタ娘が声を張り上げる。

リ「わたしのことなんですけど」

剛「何？」

リ「気にしてもらわなくても大丈夫です」

少し困り顔のサンタ娘。

陽「リリちゃん、俺はちゃんとわかってるよ！リリちゃんはサンタだつて！」

リ「いや、むしろその逆といいますか、その」

剛「へっ？」

チャキ

映画やテレビで聞いたことのあるような金属音
むしろ映画やテレビでしか見たことの無いものが陽太と剛に向けられる。

リ「忘れてもらわないといけません」

サンタ娘は申し訳なさそうな顔でソレを二人に突きつける。

陽「えっと」

剛「それは？」

リ「大丈夫です、痛いのはたぶん一瞬ですから」

黒いフォームに片手に収まるそれ。

所謂拳銃だった。

パンと乾いた音が部屋に鳴り響く。

陽太顔をすぐ横の壁に小さな穴が開いた。

陽「うつそーん」

冷や汗を流しながら小さくつぶやく陽太。

剛「こんなの有りかよぉ」

剛の目に涙が浮かんだ。

バンツと荒らしく玄関の扉を開けて飛び出す二人。

剛「陽太！お前アレ何とかして来いよ！！このままクリスマスイブに二人仲良くお陀仏とか俺嫌だかなー!!」

陽「無茶言つな！お前こそ止めてこいよ！いくら可愛い子が好きでも拳銃持った女の子とか嫌だわ！」

二人は街中を大声で叫びつつ走り抜けていく、クリスマスのイルミネーションがやけに目に染みた。

リ「鈴木さん！追うよ！」

鈴「メエエエー！」

そんな二人を追うためにサンタ娘がそりに乗り込む。

サンタ娘の声を聞いた剛が陽太に話しかける。

陽「オイ、」

剛「なんだよ？！黙って走って無いと追いつかれっぞ！」

陽「サンタのそりってさ」

剛「そりい？」

陽「空飛ぶんじゃないっけ？」

剛「あつ」

足を止めずに会話をしていた二人の背中を冷や汗が伝う。

リ「待ちなさいーい！」

鈴「メエエエー！」

可愛い声がかかるが今の二人には地獄からの使者の声にしか聞こえない。

陽「あああああ！！可愛いのに怖い！しかもなんか結構近くで声がするううー！」

剛「とりあえず二手にわかれっぞ！」

陽「おう！」

剛「お前はそのまま来た道逆走しろ！俺はこのままっすぐ行く！」

陽「テメー！見捨てる気かー！」

剛「元はといえばお前が落とし穴なんぞ作るからだろうが！」

クリスマスイブに街中をミニスカサンタとトナカイに追われながら疾走する男子高校生がそこにいた。

剛「こうなったら、オイ！陽太耳貸せ！」

陽「はあ？」

剛「いいから！」

陽太に耳打ちをする剛。

剛「わかったな！」

陽「上手くいくのかよ！」

剛「これっきやないだろ！」

陽「よし、んじゃあ俺右！」

剛「俺はこのまままっすぐ行く！」

といって二手に分かれる。

リ「あつ、鈴木さんまっすぐ行って下さい！あつちは後で追います
！」

鈴「メエエ」

サント娘は剛を追うことにしたようだ。

剛「やっぱりこっちに来るのね！これで失敗したら陽太のやつ呪う
からな！」

そう言いつつまっすぐ走り抜けていく剛。

着いた先は

剛「よっし！やっぱり門は鍵かけてねえな！」

二人の通う高校だった。

リ「学校？まあいつか、鈴木さん塀飛び越して！」

学校の塀を軽々と飛び越してグラウンドに入るサント娘。

剛はグラウンド端塀に追い詰められていた。

剛「つく、やっぱり追いつかれたか」

リ「いい加減あきらめてください」

剛「やだね！そう簡単に撃たれてたまるかよ」

舌を出しながら答える剛。

リ「そうですか、でも、もう終わりです」

そりから降りつつつぶやく。

剛「そうかな？」

リ「もう逃げ場はありませんから」

拳銃を剛に向け構える。

引き金が引かれる、

その瞬間

陽「お待たせー、ハイ！陽太くん参上！」

塀の上から何かもとい陽太が降ってきた。

リ「へっ？」

サンタ娘は一瞬何が起きた分からなかったようだが、すぐに状況を判断して銃を陽太に向けようとするが、

剛「さっせか！」

剛がサンタ娘に飛びつき銃を奪い取り、

剛「こうすりやもう大丈夫だろ！」

と壁に向かって投げつける。

そこまで耐久性がなかったのか拳銃はあっけなくバラバラになってしまう。

リ「そんな…」

呆然とするサンタ娘。

剛「はあー、二手に分かれて正解だったなあ」

陽「どっちかが追われつつ学校に誘導してもう一人が奇襲をかける、いやー作戦勝ちですなあ」

剛「この天然そうなサンタ娘だからこそできた作戦だよなあ」

のんきに二人で立ち話をする二人。

リ「どうしよう…、そうだ！」

涙声になりながらなにか閃いたのか懐ふところを探る。

剛「うをお！また拳銃か！」

陽「また追いかけることか嫌だぜ！！」

不吉な予感に後ずさりをする。

サンタ娘が懐から取り出したのは一台の携帯だった。

剛「なんだ携帯かよ」

リ「おじいちゃんどうしよう！私、私！」

どうやら祖父に電話をかけているようだ。

陽「じいちゃんってことは先代サンタか」

二人で胸を撫で下ろしていると、サンタ娘の声が耳に飛び込んできた。

リ「支給品の忘却銃壊しちゃった！」

陽「忘却銃？」

剛「さっきの拳銃のことじゃねエ？」

陽「ああ、さっき剛が壊したやつか」

剛「ん？忘却？」

陽「どした？」

剛が急に会話をやめてツカツカとサンタ娘に近づいていく。

リ「や、やつぱり怒られちゃうかなあ？あつ、」

サンタ娘の携帯電話を取り上げサンタ娘に話しかける。

剛「なあ、」

リ「ヒツ、け、携帯返してエ」

身長差があるのでサンタ娘がピヨコピヨコ飛んでも剛が持っている携帯には届かない。

剛はというと顔を伏せている。

剛「さっきのやつさ、忘却銃っていうの？」

リ「へ？」

剛「俺が、壊したやつ」

リ「は、ハイ」

剛「忘却ってことわさ、あれ致死性は無いの？」

リ「？無いですよ？けどちょっとは痛いらしいです」

剛「い…よ」

剛の声が途端に小さくなる。

顔はいまだに伏せたままだ。

表情は見えないものの体が小さく震えている。

リ「えっ？なんですか？」

剛の声が聞こえずに訪ねなおすサンタ娘。

剛「それを、」

リ「？」

後ろで見守っていた陽太が心なしか少しずつ下がって行っているようにみえる。

顔は青ざめている。

そして剛は顔を勢いよくあげ心と腹の底から叫んだ。

剛「それをもっと早く言えよおおおお!!」

祥野 陽太 水城 剛 17歳のクリスマスのイブの夜の出来事だった。

二夜目：拳銃見ました（後書き）

あいもかわずぐだついてます。

なんかだれが主人公か筆者もいまいちわかっていません。というか
ほぼ展開考えず書き上げました。つかれました。
これ、続くのかなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811r/>

〇〇VS男子高校生（2名）

2011年10月5日11時12分発行